

ベトナム戦争は終わっていない！

ベトナムのダーちゃんに会って

教科書 Surfing English Reading Lesson 12 "Little Da of Vietnam"の背景情報として、教科書の著者で、主人公のダーちゃんと親交が厚く何度もベトナムを訪れている棚橋昌代先生に、その近況をお書きいただきました。

Tanahashi Masayo
棚橋 昌代

● '01年9.11事件でベトナムがよみがえった
9.11事件は2度と繰り返されてはならぬいまわしい出来事でしたが、同時にアメリカという大国が「リーダー」として他国へ干渉し続け、テロの報復として爆撃を繰り返していることも衝撃でした。'02年1月、9.11事件の影響でキャンセルが相次ぐ中実施された沖縄修学旅行に参加しました。ひめゆり祈念館で生徒たちは、当時の生徒たちの作文から目が離せなくなったようで、生の体験が語りかける力の強さに驚きました。沖縄からベトナムに米軍のB52爆撃機が飛び立っていったことなど、日本とベトナムの関連も改めて思い起こしました。アメリカが居丈高になっている世界情勢の中で、ベトナム戦争のことも、沖縄とともに考えなければと思ったのです。

'60年代の終わりに担任した生徒たちの家の近くにはベトナム傷病兵を収容する米国の王子野戦病院(東京都北区)があり、近隣の人たちに混じって、生徒たちも病院反対デモに多数参加していました。私もデモに参加した時、たまたま野戦病院の金網越しに米兵と話ができました。「国では牧場で母が待っている。怪我が直ればまた出兵しなければならない。生きて帰れるかな」と悲しげに語りました。「きっと帰れますよ」と私は答えました。このような状況で言葉を交わせたことに、英語を教える意味をつかんだ気がしたものです。

当時は、現在では想像もつかないほどにベトナム反戦運動が市民の間に広がっており、教師たちもデモに参加したり、カンパを集めたりしましたが、報道や写真などで知る悲惨な状況からは、ベトナムがこの戦争に勝つだろうという確信は持てませんでした。しかし1975年4月30日ベトナムはとうとうアメリカに勝利。大型の

武器もなく素手で戦うも同然のベトナムがどうしてアメリカに勝てたのだろう。それは私には解けない謎のままでした。

● ベトナムへの旅

'02年の夏、英語の研究会主催のベトナムツアー「ダーちゃんに会う旅」に飛びつくように参加。初めてベトナムの地を踏んだ時は、不思議な気持ちでした。戦後25年目に初めて広島に行った時に似ていました。瓦礫^{がれき}の山にされたにも関わらず、生き生きと活気にあふれた元気な町の様子に驚きました。自分の国や自分たちの生活のためなら何でもやろうという迫力に圧倒されました。

人々のひたむきさ、したたかさに驚きました。ホーチミン市で物を売る人々、バイクに物を積み上げて走っている人々、皆自分流です。研修先で会ったベトナム人の英語教師たちも必死で勉強し、積極的に英語を使い授業に取り組んでいました。教材や機器が乏しくとも子供たちに考えさせることを主体にして、生き生きとした授業をしていました。どんなに大型兵器を使っても、アメリカがベトナムに勝てなかったのは、ベトナム人一人一人が、自分たちの国の独立のために闘う時どれほどの力を発揮するものかを想像もできなかったからだと長年の謎が解けた思いでした。

米軍による村民皆殺しに遭ったソンミ村、戦争中米兵が撒布した大量の枯葉剤被害を受けた子供たちのリハビリ施設である「ベトナム友好村」のあまりに重い事実を目をふさぎそうになる自分を励ましながらのつらい見学、楽しいメコンデルタ、ハロン湾クルーズ、水上人形劇など、魅力にあふれた旅でした。また、ホー・チミンの指導者としての奥の深さ、長いスタンスでものごとを考え、独立を勝ちとった戦略に感

服しました。彼の「独立と自由ほど尊いものはない」という言葉を知らぬベトナム人はなく、またそれが彼らの力の源だとハノイで訪問した家の女学生から聞きましたが、これほど民族にとって大切な精神が国全体に浸透しているのはすごいことです。

食べ物は米文化圏で、米の麵ホーや、春巻きなどがあり、薄味で食べやすく、辛みなども自分の好みでつけられ、私は気に入りました。近年若者に人気のあるベトナムの雑貨、衣類などもなじみやすく、何より私たち日本人にとっては物価が安いので旅の楽しみも増します。ガイドブックに「ベトナムに行くと、とりこになることが多いので要注意」とありましたが、まさにその通りで、翌'03年、'05年と3回ダーちゃんに会いに訪問してしまった次第です。

● ダーちゃんと早乙女勝元さん

1968年ベトナム中部のソンミ村の住民500人が米兵に惨殺され、その模様は『ニューヨーカー』誌のセイモア・ハーシュ記者による写真で世界に知れ渡りました。年寄り、女性、子供たちがあまりにも残酷に殺される有様は人間がここまで残酷になれるものかと世界中の人々を震撼させました（米兵の中には、自分の足を撃ち蛮行から逃れた兵士、後に裁判で証言に立った者、日記を発表した者など、人間性を取り戻した人たちの例もありましたが）。しかし、ベトナムの各地の村で同様の虐殺が行われていました。

「ダーちゃん」ことトラン・ティー・ダーさんもまた、1969年4月18日、当時ベトナムの中部の村（カンガイ省ハンティン村、ソンミ村の近く）で米軍による村民皆殺しに遭い、母を殺されました。静かな村に米軍のヘリの音が響き、朝食中の村人60人ほどに米兵が襲いかかり、一カ所に集められ、一斉射撃されたのです。生き残った村民は彼女を含め4人でした。彼女は村人の死体の下になり、気を失っていたために助かったのです。母の腕の中で泣いていた2歳の妹ティンを連れて逃げました。11歳の少女には

妹をつれての山中の逃走は厳しく、途中で妹を偶然出会った老婦人に託します。彼女は北の解放軍に保護され、米軍の蛮行の証人としてヨーロッパの各地を回りベトナム戦争の終結を訴えました。そして国際会議で訴えるために、ブダペストのホテルで待機中に、作家の早乙女勝元さんの目にとまり、彼と話をしたのです。早乙女さんは、ベトナム解放の前年それを『ベトナムのダーちゃん』という子供向けの本として発表、半年で10万部というベストセラーとなりました。その印税をベトナムに寄付した早乙女さんは解放前に北ベトナムに招待されています。ダーちゃんとはその後消息がつかめないままでしたが、1991年テレビ番組『ニュースステーション』の取材で再会を実現、20分放映されました。ダーちゃんは3人の娘と元解放戦士の夫と暮らしていました。教師になりたいと言っていたのに、近所の病院の医師助手となり、長年離れ離れだった妹さんも同病院で看護師となっていました。貧しい病院、彼女の家、母の墓前で号泣する姉妹の姿など痛々しい様子を収め、涙せずにはいられない感動的な内容でした。早乙女さんは1994年に『ベトナムのダーちゃん』の映画も製作したり、ダーちゃんもその後日本の平和団体の招待で来日しました。早乙女さんはダーちゃん一家を物心両面から支え、ダーちゃんから日本の父と慕われています。

● ダーちゃんに会えた

'02年夏、カンガイ省の郊外の路上に止まった私たち一行のバスに、小柄の女性が私たちを待ちきれず乗り込んできました。くりくりとした眼、えくぼの目立つ笑顔のダーちゃんでした。もう「ダーちゃん」という呼び名は似合わない中年女性でしたが、その笑顔は早乙女さんの本で見たままでした。前述のテレビ番組で見た姿よりはふっくらとして、生活もよくなっているようでした。ダーちゃんの家は清潔な居間に通され、家族そろって出迎えられました。縦長の家で、タイル張りの2、3段の階段から（ここから靴

を脱ぐ)部屋につながり、そこは客間となり、その奥には土間になった台所、洗濯場、トイレ、家事室などが2つ続いていました。彼女の病院は家のすぐそばにあり、施設も整ってきているとのこと。家の前は小学校で、ダーちゃんはそこで自分の体験を語ってもいるそうです。彼女の夫は戦争中の怪我で体を壊していましたが、彼女の献身的な世話で元気になり、今では保険の仕事について生活も平均的収入(月1万円)を得て、家族5人が苦しい中にも仲良く暮らしている現状でした。'02年には上の2人の娘さんたちは家を離れ、医療と会計の勉強をしていました。

妹ティンさんも警察官の夫、高校生の娘、小学生の息子の4人で姉のすぐ近くに住んでいるとのことでした。ダーちゃんが悲しい思い出を語り涙する時はいつも、娘たちも涙を流してやさしく慈しむように母にふれていました。妹の子供たちも同様です。その子供たちの様子には、親たちの悲惨な体験を受け止め、もう二度とそのような経験は親にはさせないという固い決意が伺えました。戦争でひどい目に遭い、苦しみ抜いた果てに得た今の平安。それを壊したくないと強く語っているダーちゃんの思いが、つらい体験を語る涙の中に感じられました。彼女は私たちが聞きたい当時のことにも、しっかりと語り口で、雄弁に語ってくれましたが、妹さんは控えめに小さな声で言葉も少なく、9歳上で母代わりの姉を信頼し尊敬している感じが感じられました。

「ベトナムを支援してきてくれた人たちは皆友達であり仲間だ」と語るダーちゃんの夫は、体は小柄でも父親のやさしさと威厳を備え、ダーちゃんを長年支えてきた誠実さを感じました。私たちが仲間と受け入れる大らかな態度に接していると、胸が詰まりました。ベトナム戦争に基地や、事業を通して日本が間接的に荷担してきたこと、1945年日本の占領下でベトナムが200万人餓死した事実の影に、日本軍のコメの強制買い付けやコメからジュートへの転作強要な

どがあったことなどを思い起こしたからでした。

'03年夏、再びダーちゃんご夫妻にお会いした時は、まるで親戚のように迎えられました。1991年のニュースステーションの映像をダーちゃん一家と涙、涙で見ながら、前年には聞けなかった妹さんとの再会、その後の生活などを語ってもらいました。3人の娘さんたちも母の苦しみや悲しみを理解し、心からのいたわりを両親に示していました。子供たちは無理をしても上の学校に入りたいと言っていました。'05年春、早乙女さんとご一緒の訪問時には上の2人の娘たちは2年ほどの専門学校をやめて、両親の下で暮らしながら働いていました。前回両親の元を離れることが悲しいと泣いた成績のよい三女は、真っ白のアオザイの制服もまぶしい高校生になっており、姉たちは、彼女の未来に一家の期待を託して家に戻ったのでした。

ダーちゃんの忘れられないエピソードがあります。'03年のツアーでご一緒だった80歳あまりの婦人はご長男を22歳で事故でなくしたそうなのですが、その息子さんが当時ベトナム戦争反対運動に参加していて、亡くなる時「ベトナムの青年を殺させるな。ベトナム万歳。」と言いながら仲間にもまれて逝かれたこと、その息子さんの遺志を引き継いでこれまで生きていらしたことを切々と話し、「ダーちゃんに会えて胸がいっぱいです」と嗚咽されました。その時ダーちゃんは、さっと近づき彼女をしばらく抱きしめて、「私も肉親を失っているの、あなたの母親としての悲しみはよくわかります。私があなたの娘になります」と泣きました。ダーちゃんがベトナムを支援してきた人々に深い思いを抱いていることは理解していましたが、心の奥底からつきあげるようにして、彼女への共感を表すとは想像を越えていました。信じられる人たちへの熱い思いがほとぼしりでした。口では説明し切れない酷い状況を生き抜いてこられたのは、ダーちゃんの間人を信じる心の大きさにあると感じました。その場にい



ダーちゃんのお宅でご一家と。左からダーちゃんの夫、筆者、長女、ダーちゃん、次女、姪。2002年。

た私たちは、人間の大きさ、深さ、自由と平和のために誠実に生きてこられた人々への畏敬の念で、熱い涙が止まらなくなりました。

ダーちゃんの人間への深い信頼感、子供たちに託す思いを教科書の本文の最後に入れたことで、悲惨な過去を知るだけでなく、未来へつなぐ教材になったと思います。

'05年、ベトナム解放30周年の春の訪問でできあがった『Surfing Reading』を一家に手渡しました。自分たちの体験が日本で伝えられることを喜んでくれました(政府の高官の方にも早乙女さんが教科書を渡して下さり、感激でした)。

● ベトナム戦争は終わっていない 枯葉剤被害と裁判

ベトナム戦争で、米軍は'62年から'72年までの間に南ベトナムに推定7500万リットルの枯葉剤を撒布しました。解放軍のベトナム兵士を森林に隠れさせないためです。その影響は孫の代まで「奇形」、脳性麻痺など様々な病気となって現れ、被害者は約100万人に及び、手当も不十分なままです。過去3回のベトナム訪問で、ハノイの平和村、友好村を訪ね、子供から大人までの被害者の状況を見学してきましたが、心が震える光景でした。撒布された土地から流れ出たダイオキシンが川や湖の魚から人間の口に入り、彼らの成長をゆがめてきたのです。これらの施設に入れた子供たちの多くはリハビリで社会復帰をめざし、パソコンや刺繍、縫製、細

工などに励んでいます。栄養補給も施設の主な目的の一つだと聞きました。確かに、2年前に訪問した時よりも身体が成長し、しっかりした子供たちにも出会うことができましたが、その数はほんのわずかで、被害者の多くは、なぜ「奇形」など様々な病気になったのか分からぬまま、援助も受けられていないのが現状です。撒布した米兵たちにもダイオキシンの被害は当然現れ、問題となり、製薬会社を相手取った裁判で、一部の米兵は補償を勝ち取っています。

昨年、ベトナムの被害者たちが立ち上がりアメリカの製薬会社への裁判を起こしましたが、今年3月「ベトナムの被害者たちの症状が枯葉剤被害とは証明されない」とニューヨーク・ブルックリン連邦裁判所は却下しました。この判決はベトナム人にとって到底納得のいかないものでした。米兵はベトナム戦争時の枯葉剤の被害者と認められ補償されているのに、兵士ばかりか住民全員が被害者であるベトナム人の被害は認めないのです。たとえ血液調査で証拠を集めても、身体に影響を与えたダイオキシンが米軍が撒布したものと証明できないというのです。この訴訟の責任者のグエンティ・ビン女史にこの間の事情を聞くことができました。現在、ベトナム政府も被害者に補助を出しているが微々たるもので、経済の発達途上のベトナムには、枯葉剤被害へ世界各国の物心両面の支援が何よりも頼りであると訴えていました。

現在、同様のことが、イラクで、またイラク帰還兵の間で劣化ウラン被害として問題になっています。何という悪の連鎖でしょう。ベトナム戦争は確実に今につながり、とても大きな課題を私たちに示しているのです。

今ベトナムは「過去を閉ざして未来を志向する」というドイモイ政策で、新しい国造りに向かっています。南北ベトナムの融合、貧富の格差の解消、海外で成功した国外移住ベトナム人の帰国、米国との貿易交渉など、国としての課題は山積していますが、その行方を見たいと思います。(都立三田高等学校教員)